嬉泉の新聞
2026.10
95

# KISEN no SHIMBUN

私たちの「今」を伝えるニュースレター

目次

・特集①　石井理事長より
・特集②　理事・評議員・監事の方々のことば
・嬉泉の歴史1966-1998
・トピックニュース




60th Anniversary Special Edition

KISEN

*Special Feature Message*

# KISENをつなぐ－60年の歩みを、次の実践へ

石井 啓 社会福祉法人嬉泉 理事長

今年、嬉泉は創立60周年を迎えました。それにあわせて、この「嬉泉の新聞」も紙面デザインを全面リニューアルいたしました。また、60周年を記念して12月に式典を挙行します。テーマは「KISENをつなぐ」です。これは、外に向けての祝賀というより、評議員・役員・職員が一堂に会し、法人のこれまでを確かめ、これからを誓い合う内向きの節目となる会にしたいと考えています。

振り返れば、故須藤晃弘氏が「還暦の蓄えを世のため人のために」と志を固め、熱と信念を抱いた故石井哲夫と出会ったことが嬉泉の出発点でした。1965年、東京都世田谷区に子どもの生活研究所が生まれ、保育・療育・相談を併置した実践が始動。翌66年に社会福祉法人となり、千葉県袖ケ浦市の「袖ケ浦のびろ学園」（1977年）、「袖ケ浦ひかりの学園」（1984年）へと展開し、グループホームや保育所の整備、特定相談などの地域支援を確立して行きました。そして板橋・清瀬・大田など各地域での行政からの委託・指定管理事業の受託へと歩を進めて今日に至りました。二代目理事長・故須藤祐司氏が遺した「人に尽くすことを最上の喜びとする」という精神は、現場の皆さんの一日一日の実践に生きています。まずは先達に、そしてこの歩みをともに紡いだすべての仲間に、深い敬意と感謝を申し上げます。

嬉泉の核は「受容的交流」です。人を人として尊重し、目の前の個人を理解しようとする姿勢。言葉の表出が難しく、強い不安や緊張の中を懸命に生きる人に対して、私たち自身の心の動きを自覚し、関係性を耕し、信頼を積み重ねること。ヴィクトール・フランクルが説いた「三つの価値」のうち、創造価値・体験価値の実現が難しい局面でも、その人が運命に向き合う態度価値を見いだし、認め、貴ぶこと。スローガン「懸命に生きる。その生き方を支える。」は、まさにこの支援の神髄です。

60周年の節目に、私からとくにお伝えしたいことは三つあります。第一に、受容的交流の再確認。これは技法ではなく姿勢であり、関係そのものです。「その人の内面への敬意」から援助は始まる―この原点をあらためて共有したいと思います。第二に、現場への敬意。袖ケ浦のびろ学園、袖ケ浦ひかりの学園、子ども発達支援センターたのしみ、うぐいす園、赤塚福祉園、とことこ、わかばの家、嬉泉の保育各園、めばえ学園、こぐま学園、おおらか学園、トスカ…それぞれの現場で日々「小さな一歩」を積み上げる職員たちが嬉泉の誇りです。第三に、次世代への継承。職員に創業者を知らない世代が増えた今、理念を言葉にし、経験を学びに変え、技能を体系化して伝える責任が私たちにあります。　その中核となるのが、60周年記念事業「キセンヲツナグ～受容的交流テキスト作成プロジェクト」です。初学者向けガイドブックとして、受容的交流の要点を言語化し、嬉泉の内外で学べる入口を整える試みです。東京大学の渡邊慶一郎教授の監修のもと、原理・原則・プロセス・倫理をできる限り明晰にまとめました。職人技の側面を持つ嬉泉の実践を、多くの人と共有可能な学びへ。困難に向き合う他法人・地域の現場にも開かれた資源として、次の10年に向けた嬉泉の挑戦です。

それに伴って、今後10年のビジョンも共有します。第一に、受容的交流の言語化と研修体系化。新人から現場リーダーまで段階的に学べるカリキュラムを整え、記録・振り返り・評価の質を高めます。第二に、コンサルテーション事業。関係づくりの視点と具体の援助設計を携え、困りごとを抱える現場に寄り添い、地域に良い循環を生み出します。第三に、人材獲得と育成。採用広報の刷新、実習・インターンの拡充、働きながら学べる研修、見通しの持てるキャリアパス―「学び直せる職場」を合言葉に進めます。加えて、防災・BCPや情報の質向上など、組織の足腰を鍛える取り組みも着実に積み重ねます。

法人理念として「KISEN BOOK」に記された言葉は、嬉泉の存在意義-「自分らしさを受け容れ合える社会の実現」を、私たち自身が自分ごととして語り、日々の選択と行動で示すための共通言語です。理念は掲示物ではなく、現場で生きる意思決定の基準。職員たちの仕事ぶりが、すでにそれを雄弁に語っています。



創立から60年、法人を挙げてのバザー開催も、本格的な温水プールの整備も、アトリエAUTOSの実現も、世田谷や袖ケ浦の園舎増改築も、行政からの事業委託・指定管理の受託も、そして受容的交流テキストの作成も…嬉泉は「やってみよう」でここまで来ました。成功も失敗も素直に受け止め、さらに精進を重ねる-先達の教えの通りに。私たちは、これからも「要領よく」ではなく「懸命に」やっていきます。その生き方を支えるのが嬉泉であり、嬉泉の仲間です。

須藤晃弘氏、須藤祐司氏、そして父・石井哲夫の創業の志に、あらためて深く敬意を表します。現役員・評議員各位、そして日々現場を担うすべての職員に心から感謝を。KISENをつなぐ-60年の歩みを、次の実践へ。これからの10年も、私たちは進み続けます。変わらぬご支援とご指導ご鞭撻方よろしくお願い申し上げます。



# 社会福祉法人嬉泉 60 周年に寄せて

**中島 健一** 社会福祉法人嬉泉 監事（愛知学院大学 教授）

法人創立60周年、誠におめでとうございます。私が嬉泉に関わるようになって40年ほどであり、ほぼ基礎は出来上がってからのお付き合いとなりますが、それでもいろいろなことがありさまざまな困難に一丸となって立ち向かい乗り越えてこられた石井啓理事長をはじめとする職員各位の情熱と努力に頭が下がる思いがございます。

さて、嬉泉って何だろう、他の社会福祉法人とどこが違うのだろうと考えることがあります。受容的交流理論、これは嬉泉の利用者に対する援助の大きな柱ではあります。でも、感じることは利用者に対する援助法であると同時に、職員自身の生き方や職員間の関係の取り方にも大きな影響を与えているように思われます。もちろん職員一人ひとりに個性はございますし思うところはそれぞれあると思います。世代間の違いもあると思います。ただ、皆さんが受容的交流理論をしっかり身につけていることで他法人の職員とはひと味違う人間としての奥深さを感じるのです。これは、ヨイショではなく、なんとも言語化できないのですが、間違いなく存在します。

先日の理事会で、「事業計画書に『援助』という言葉が使われているが、近年の例に習って『支援』という言葉を使った方がよいのではないか」と申し上げたところ、理事長より「いや、こだわりがあってあえて使っているのです。『支援』だと綺麗すぎます。汗をかいて必死に取り組むことが『援助』という言葉に込められているのです」というお言葉をいただきました。なるほど、すばらしい泥臭さだと感じました。綺麗に、汗をかかずに、ではなく泥臭く受容的交流を実践する職員の姿がその一言に込められているように思われました。

受容的交流理論はわかりにくいです。他の○○療法のように具体的にこれをこうやるというマニュアルなど作れません。そこがとても『日本的』だと思います。無信仰のようであって自然の万物に畏怖・感謝している、宗教的教えや戒律などなくても他者に迷惑をかけない、それが日本人です。論理の積み上げで「こうして、こうやって」ではなく漠然と本質的なものを感覚的に捉えつつ臨機応変に行動する。障害者の障害部分だけをどうするか考える○○療法とは異なり対象者を全人的に捉えてその人が生きること自体を援助する、それが受容的交流であり嬉泉職員の皆さん全員に共通する誇るべき特徴なのかなと思ったりします。

益々のご発展を心より祈念申し上げます。



# 社会福祉法人嬉泉 60 周年に寄せて

**亀谷 一雄** 社会福祉法人嬉泉 理事（元 社会福祉法人嬉泉 事務局長）

嬉泉は昭和40年に須藤晃弘初代理事長と自閉症研究の第一人者である石井哲夫先生により、家族や学校、地域にうまく適応できない自閉症児を始めとした発達障害児・者支援の先駆となった法人であり、二代目須藤祐司理事長、三代目(現)石井啓理事長により、創設時より一貫して自閉症療育に取り組んでおります。

私は当初、社会福祉事業、自閉症療育などについては一般的な知識しか持ち合わせていませんでした。平成5年4月より法人研修合宿を経験させていただいた折、石井先生より「これからの社会福祉法人の経営、運営と事務組織のあり方」についてレポートを提出するように求められました。それまで金融、財務、経営の仕事に就いていた私にとっては「何を？何で？知識なし」の宿題でした。当時、金融機関の再編成が社会構造的に見直されている状況下でした。

先生に「まだ福祉について何も知らない私には？」と相談したところ、「君の新しい視点と未経験だからこその感覚・視野を通してこそのものを私は知りたい」と2ヶ月の時間を与えられ、6月下旬に「これで大丈夫？御依頼に合っている？」の不安の中レポートを提出した事を鮮明に覚えています。

1カ月後、入職して3カ月が経過した人事告知で石井先生より「事務主任としてまず事務組織の再編成を頼むよ。よろしく。」とのお言葉をいただき、入社同期でもある石井啓理事長と供に再編に取り組みました。その間も石井先生や須藤祐司前理事長には多大なる御指導と御鞭撻を賜り、更に(現)小池事務局長も加わり、「三人寄れば文殊の知恵」のことわざ通り事務職員の理解と協力を得ながら、組織一丸となり再編成に取り組みました。

思えば、事務運営、組織のあり方、事務体制、書類等の流れ（期限、決裁、承認、報連相）、運営費の予算（有効、必要性の重視）などの基本的知識、認識を積み上げ、一方では障害児・者の支援の為の地域ニーズ、環境状況の把握、施設設立、環境整備等の運営など、実務基盤の構築と施設運営の両輪を担いながらの充実の職歴32年でした。

発足以来「福祉とは受容的交流の場である」との援助実践とし、これからも限りなく発達障害の方々への愛情と努力の心が利用者を通じ、保護者、御支援の方々に強く深く浸透し信頼される姿こそが嬉泉そのものであると考えております。

これからも尚一層の御指導、御支援を賜わりますよう宜しくお願い申し上げます。



# 設立60周年を祝して

吉岡 則重 社会福祉法人嬉泉 評議員（元 東京都福祉保健局 次長）

社会福祉法人嬉泉の設立60周年、おめでとうございます。いつぞや50周年のお祝いを申し上げて、もう10年が経ったのかというのが正直なところですが、そうは言っても、理事長が石井啓さんに替わり、新たな体制のもとで、嬉泉としての発信や地域への取り組みに着実な成果を挙げていることに心より敬意を表したいと思います。なかでも、『心のケア研修テキスト』は阿部秀雄先生のご尽力の賜で、大変分かりやすく、しかもよくまとまっていて、このような資料を媒介にして受容的交流理論の理解が広がることを期待しています。

加えて、昨年より『キセンヲツナグプロジェクト』で受容的交流をまとめたガイドブックを制作するとのことで、楽しみにしております。阿部先生のテキストは大変良質なものと受け止めておりますが、やはり現場の皆さんの体験や発見、感じたことや考えたことなどが嬉泉の独自の財産であり、こういうガイドブックをまとめる作業などを通して、受容的交流理論を肉付けし、そして深めていって頂きたいと思っています。「現場ってのはな、人と人が対峙する、一回限りの場なんだ、一人ひとりそれぞれの背景もあるんだ、それを簡単に言葉になどできるものか、現場のことが何も分かってないな」と言いたくなる人もいるかと思いますが、生の体験を言葉で表すという困難なことに先駆者として取り組んだのが石井哲夫さんだったことを思い起こしてください。嬉泉の皆さんには、その志を受け継いでほしいと期待しているのです。

一方で、社会に目を転ずれば、この10年間で、わが国はどうなったでしょうか。経済的格差が広がり、社会の分断を煽るような仕掛けがあるにもかかわらず、情けないことに社会の基本的な課題に立ち向かうべき国の運営は悪くなるばかりです。「今だけ、カネだけ、自分だけ」これは、受容的交流とは真逆で、人を人として尊重しない、敢えて言えば自分自身をも大事にしない生き方だと思いますが、こういう人たちが更に増えていったら、障害者には生きづらい世の中に後戻りしてしまいかねません。そうしないためには、どうするか。なにも、皆で天下国家を論じようと言っているわけではありません。むしろ、逆です。私たち一人ひとりが、自分の持ち場のなかで誠実に生きていく、そしてその積み重ねです。地域のなかで人の繋がりを大切にしていくことこそが、ガタガタになった国家に翻弄されないための一番の有効策でしょう。

どうでしょう？これは、まさに嬉泉の皆さんが日々実践していることではありませんか？これからも、ご家族や、地域の方々とのつながりも大事にしながら、日々の小さな活動を着実に積み重ねていっていただきたいと念じております。

そう言えば、今年は、茨木のり子という詩人の生誕100年でもありますので、その詩の一節を紹介して小文を終わりにしたいと思います。（なお、Y.Yとは、女優の山本安英さんのことです。）

「汲むーY・Yにー」
人に対しても世の中に対しても
人を人とも思わなくなったとき
堕落が始まるのね

頼りない生牡蠣のような感受性
それらを鍛える必要は少しもなかったのだな
年老いても咲きたての薔薇　柔らかく
外にむかってひらかれるのこそ難しい
あらゆる仕事
すべてのいい仕事の核には
震える弱いアンテナが隠されている　きっと……



# 社会福祉法人嬉泉 60 周年に寄せて

田村 紀子 社会福祉法人嬉泉 評議員（一般社団法人親泉会 代表理事）

社会福祉法人嬉泉様創立60周年という記念すべき節目を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。

私は評議員の立場として法人の運営を見守らせていただくとともに、一人の利用者の親としても長年お世話になってまいりました。

今年62歳になる息子が嬉泉の療育を受けるようになったのは中学生になってからでした。当時「原宿のびろ」と言っていた原宿の日本社会福祉事業大学の古い校舎にセラピーを受けに毎週通い始め、その後、中学卒業と同時に袖ケ浦のびろ学園に入所、現在は成人施設の袖ケ浦ひかりの学園で支援を受けて穏やかに暮せるようになっております。

振り返りますと、入所以来、他害や破壊等強度の行動障害の息子は片時も目を離すことができず、常に職員の方が文字通り体を張って見守らなければならない状態でした。決して見放すことなく温かく見守られながら高い専門性に裏打ちされた支援を受けることができたおかげで今日の穏やかな日々があると思っています。入所以来40年、息子だけでなく親である私たちもまた、幾度となく励まされ、救われてまいりました。この場をお借りして歴代の役職員をはじめ、現在も献身的に支援にあたってくださっている皆様に、心から感謝申し上げます。

嬉泉設立から60年という歴史の中で、社会福祉を取り巻く制度や社会情勢が大きく変わり、近年、「本人の意思決定の支援が重要」といわれるようになりました。これこそ、一貫して本人に寄り添い本人の気持ちを大切にするという嬉泉設立当初から故石井哲夫先生が掲げられた療育の理念である「受容的交流」そのものであると、今、改めて感じるところです。

結びに、創立以来受け継がれてきた理念を大切にしながら、新たな時代の福祉に取り組み、ますます発展されますことを心よりご祈念申し上げますとともに、役職員の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。



# 社会福祉法人嬉泉60周年に寄せて

小野　多規子　社会福祉法人嬉泉 評議員（一般社団法人親泉会 理事）

社会福祉法人嬉泉の法人設立60周年、心からお祝い申し上げます。

私は学生の頃、自閉症児のキャンプに参加し、その出会いから、もっと自閉症のことを知りたいと思うようになり、その当時、嬉泉の石井哲夫先生が新しく自閉症の入所施設を作ったという話を聞き、昭和53年に嬉泉に就職しました。職員として24年間働き、その後、平成18年に袖ケ浦ひかりの学園の親たちが立ち上げた後見法人一般社団法人親泉会に関わるようになり、20年が過ぎようとしています。

私が就職した当時は、子どもの生活研究所と袖ヶ浦のびろ学園の2つの事業所で職員60名ほどだったと思います。私が配属された袖ヶ浦のびろ学園は開設されたばかりで15名くらいの自閉症児が生活をしており、仕事は厳しい面がありましたが、利用者も職員も「共に暮らす」という毎日で、職員同士の交流の機会も多かったことを思い出します。石井哲夫先生が先頭に立ち、次々と新しい仕事を始めて、どんどん事業が大きくなっていき、職員も増えていく時代の嬉泉でした。

時代を経て今は、社会福祉の制度が整い、障害をもつ方への支援が充実してきました。仕組みが整っていくことは良いことだと思います。しかし、人を支援するのは人であり、その人がどういう考えを持ち、どういう言動をするかにより、対象となる障害を持つ方の生活が決まります。職員である人が育つこと、いわゆる人材育成がどのように行われるかは時代が変わっても問われ続ける課題だと考えます。私は「受容的交流」は「目の前にいる人を大事にし、人ときちんと関わること」と受け止めています。これは、障害のあるなしに関係なく、人間関係においての基本だということを嬉泉で学びました。

これからの嬉泉に期待されていることは、引き継がれてきた「受容的交流理論」に基づき、障害を持つ方が人として安心して暮らせる、人として尊重される社会の実現に向けての事業や活動を展開していくことではないかと考えます。課題や問題は常にあるかと思いますが、良い仕事を続けていってほしいと心から願っています。



# 嬉泉との出会い

小島　直子　社会福祉法人嬉泉 評議員（元 袖ケ浦市社会福祉協議会 会長）

60周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

初めて嬉泉を訪れたのは今から30年前。畑が広がる道を走り抜けた先を左折。そして、森の中を通り抜けて進むと桜並木が続き、やがて学園の建物が見えて来ました。手前は広場となっていて、利用者さんが思い思いに歩いていました。その様子が小さな一つの村の風景に見えました。その風景が私と嬉泉との出会いであり、感動の始まりでした。

嬉泉の事業として地域交流の事業が始まり、友人から「のびろ学園で野菜やパンや作品などの販売をするので手伝ってほしい」と声をかけられました。「なごやかの店」と名づけられたお店は作り手の利用者さんと買物に来られた地域の皆さんとの交流の場となりました。又、駅前に出来たお店「FORT」は地域交流の拠点となりました。その後も支援の先生方の研修会の参加、そして多くの皆さんが来場するバザー、餅つき、お祭りなど色々な行事にお誘いを頂き、利用者さんや先生方の笑顔に出会えました。地域交流活動は嬉しい場所であり、楽しい時間となりました。嬉泉でのこの様な研修や体験がその後、勤務した公立小中学校での子ども達とのかかわりの場で生かせ、子ども達や保護者への良い支援に繋げることが出来たように思います。又、地域を基盤とした社会福祉の推進活動を行う中で、令和7年6月までの6年間を袖ケ浦市社会福祉協議会会長とし多くの方々のお力添えにより務めることが出来ました。袖ケ浦市では「地域を共に創っていく『地域共生社会』を実現する必要がある」とし、「それぞれの地域でその人らしい安心で充実した生活をおくれるまちづくり」の実現を目指し、事業を推進しています。

30年前に一人のボランティアとして嬉泉と出会い、その後は苦情処理第三者委員、評議員として微力ではありますが関わらせて頂いております。創立60周年の今年、新たに親泉会の理事としてのご縁を繋がらせて頂いた事に喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、利用者さんの笑顔と優しいまなざしに出会えるようなお手伝いが出来たら嬉しいです。

60周年を迎えられた嬉泉の素晴らしい実践が今後も続くことをご祈念申し上げ、「共に」の言葉を心に留め、嬉泉の応援団の一人であり続けたいと思っております。

60th Anniversary

*KISEN HISTORY*

# 嬉泉の歴史

## 1965-1998

### 設立からアトリエAUTOSまで

1966年の創立から、歩みを重ねてきた嬉泉。
子どもたち一人ひとりと向き合い、その成長と幸せを願いながら、
時代や社会の変化とともに活動の場を広げてきました。
ここでは、嬉泉の原点から現在へとつながる歩みの前半、
1966年から1998年までの歴史を振り返ります。

**1965**（昭和40年）
財団法人**嬉泉子どもの生活研究所**設立認可される

**1966**（昭和41年）
社会福祉法人**嬉泉**として変更認可される

**1970**（昭和45年）
常陸宮姫殿下のご来所をいただく

**1973**（昭和48年）
共に生活をする中で受容的交流を体験的に学ぶ「合宿」



1970年代の学童合宿の模様。日常と異なる場・子どもに対応しなければならない合宿は、参加する職員にとって実践を通して、嬉泉（石井哲夫）が大事にした自発性、即興性、柔軟性を育てる重要な研修の場であった。

**1977**（昭和52年）
**嬉泉福祉交流センター袖ケ浦**
障害児入所施設**袖ケ浦のびろ学園**落成

**1977 EPISODE**

**広大な自然にかこまれて**

嬉泉の初代理事長・須藤晃弘が私財を投じて買収した千葉県袖ケ浦市の広大な土地に、嬉泉福祉交流センターは設立された。その拠点である袖ケ浦のびろ学園は、子どもたちが楽しく活き活きと暮らせるようにと、この種の施設としては当時の基準の2倍もの広さを有し、居室や庭なども、職員たちが今までの支援経験で培った知恵を出し合いながら設計された。当時、子どもたちと職員が24時間生活をともにする施設は大変珍しかったので周囲の期待も大きく、建設時から多くの問い合わせがあったという。



**1980**（昭和55年）
児童発達支援センター
**子どもの生活研究所めばえ学園**の設置が認可

**1982**（昭和57年）
NHK教育テレビ「障害幼児とともに」（のちに「子どもの発達相談」と変更）への協力が始まる

**1984**（昭和59年）
障害者支援施設
**袖ケ浦ひかりの学園**が開設され、年長自閉症児及び自閉症者の療育が開始される

## 1985 （昭和60年）

袖ケ浦ひかりの学園の職業指導が本格化され、製パン、焼き芋、機織り、陶芸、販売など多様な仕事が開始される

第一回**自閉症治療教育セミナー**をジーン・シモンズ女史を囲み、安田生命ホールにて開催

### 1985 EPISODE

**自閉症研究を多くの人へ伝えたい**

石井哲夫を中心とした嬉泉は施設内での活動にとどまらず、自閉症やその療育法の啓蒙を行うセミナーを精力的に行っていた。当時は自閉症について学ぶ機会が少なく、自閉症を学びたい人や石井の考えに共感する人が全国から集まったという。エリック・ショプラー氏など、著名な学者を海外から招聘するなど、日本の自閉症研究を先駆的に行う法人でもあった。




## 1988 （昭和63年）

日本船舶振興会の補助による**選択的作業指導棟完成**

### 1988 EPISODE

**「やってもらう」ではなく**
**「選んでもらう」**

当時の障害者への作業指導では利用者に手本を見せて、その通りにやってもらうことが主流であった。しかし、嬉泉ではそもそもの作業を利用者に「選んでもらう」指導を行った。作業棟には部屋の真ん中にソファがあり、その周りには絵や陶芸、機織りなどの作業が360度見渡せるようにレイアウトされた。利用者はどれを選んでもいい。もちろん、何も選ばないことを選んでもいい。自分の感覚に合うあるものを選んでもらう。押し付けではなく、自分の感情や感覚を大切にしてほしいという嬉泉の受容的交流の考えがこの建物にも表れている。






## 1990 （平成2年）

バザーの様子



## 1993 （平成5年）

**東京都板橋区立赤塚福祉園**を開設

### 1993 EPISODE

**頼まれたら断らない**
**一委託業務のはじまり**

嬉泉本部のある世田谷区からは少し離れた板橋区から福祉園の事業を託された。「どうやら他の法人から断られた話がうちにまわってきたようで…。急な話でしたが石井哲夫は頼まれたら断らない性分なので、よし、やろう！と」（当時の事務職員）。初めての委託事業で、建物も完成していない状態から準備期間3ヶ月ほどで開設にこぎつけた。

「区立の福祉園」という枠組みのなかで、コツコツと利用者との関係性を築く努力を重ねた結果、次第に行政からの業務委託の依頼が増えることになった。




写真は赤塚福祉園の前身である
高島平五丁目福祉園

## 1998 （平成10年）

袖ケ浦ひかりの学園
利用者の**芸術作品集「AUTOS」**が小学館から発売される

芸術作品展**「アトリエAUTOS」**を銀座ギャラリー青羅にて開催

## 1999 →

**嬉泉の歩みは次号へ**

1999年から現在までの歩みをご紹介します。

*Topic news*

# 「キセンヲツナグ～受容的交流テキスト作成プロジェクト」の取り組み

プロジェクト事務局　大岩　香代子

法人設立60周年記念事業として、2025年2月より「キセンヲツナグ～受容的交流テキスト作成プロジェクト」が始動した。達成目標は、受容的交流の哲学・考え方・技法を、経験の浅い新人職員や実習・研修生向けのわかりやすいガイドとしてまとめ、2026年12月の記念式典でお披露目することである。約1年半の活動を経て、この度『受容的交流アプローチ入門～より良い対人援助のために』の完成に至った。

メンバーは、石井啓理事長を筆頭に、3名の事務局メンバーと各拠点の現場経験を積んだ中核職員８名を選抜。全体の監修には、法人が長年お世話になり受容的交流の理解者として信頼を寄せる渡邊慶一郎先生（東京大学教授）にご協力いただいた。キックオフミーティングでは、プロジェクト名を全員で決定し、「嬉泉を未来へつなげていく」という意味から「キセンヲツナグ」と命名した。以後は受容的交流の意見交換をしたが、その先はどう進めていくか、どこからどう手を付けたらよいのか、皆目見当のつかないような状態からのスタートだった。月1回、数度のミーティングを重ねる中で編集のプロの力を借りるべきとの結論に至り、渡邊先生のご紹介でライターの神素子氏が加わった。

振り返れば、「受容的交流」は、前常務理事の故・石井哲夫先生が、法人設立以前に、当時まだ一般にはあまり知られていなかった「自閉症児」と出会い、困難の中でかかわりを深めようとする志から生み出されたものだと聞いている。「自閉症だから～」という固定観念にとらわれず、「一人の人として心の動きを共感的に理解し、基本的な人間関係を育み、積極的な交流を通じて必要な援助を展開する」ことを基本に据える。自閉症に限らず、保育・支援の現場全体に通じる根幹であり、石井先生の逝去後も法人の援助理念として継承されてきた。

ただし、石井先生は実践者・研究者として長年、難解なケースを共に体験し、言葉で伝える難しさを伴う「職人芸」の域に近い実践を積み重ねてこられた。現在の嬉泉の管理者層、指導者層の職員の多くは、少なからず石井先生の実践や研究に身近に触れ、体験を共にする中で感覚を養い、言葉で表現しきれない部分を抱えつつも、経験を通じて共通感覚を育んできた。だからこそ、受容的交流の本質を「言葉で明確化」する難しさが常に残っていた。

石井先生が亡くなられて12年が経つ今も、対人援助の根幹的な価値としての受容的交流を継承する意義は揺らがない。テキスト作成の機運は、長年の検討を経て60周年という節目を契機に実現へと踏み出したものである。渡邊先生をはじめとする外部のプロフェッショナルの協力も得て、この度完成に至ったことは、画期的とも言え、非常に感慨深い。

今回の完成は、長年経験を積んできた職員の実践や事例に基づきながら、初心者にも読みやすくわかりやすい入門テキストになった、と思う。読みやすさ・わかりやすさを優先し、敢えて理論的な説明をそぎ落としたところはあるが、同テキストが、対人援助の仕事を志し、縁あって「嬉泉」に入職してきてくれた職員にとって、少しでも受容的交流の価値や、その先に続くこの仕事の面白さや奥深さを感じ、仕事を続けていく手助けになることを願っている。

このプロジェクトを支えてくれた渡邊先生、神素子氏、デザイナー・漫画家・校正の方々の協力に、深く感謝する。特に企画・編集を担った神氏は、私たちプロジェクトメンバーの感覚的でわかりにくい話の本質を的確に捉え、袖ケ浦の施設に足を運んで取材をし、こちらの要望に応えて幾度も企画を修正していただいた。真摯で根気強いお付き合いに、心から御礼を申し上げたい。



〈表紙〉



〈本文の一部。マンガを使うなど、わかりやすさを重視している〉

社会福祉法人 嬉泉
〒156-0055 東京都世田谷区船橋1-30-9
E-mail：kisen@kisenfukushi.com
https://www.kisenfukushi.com
公式サイト「KISEN」
寄付サイト「シンカプル」